「国語」の出題の意図

国語の問題は、高等学校までに培った国語の総合力を測ることを目的として、文科・理科を問わず、現代文・古文・漢文の三分野すべてから出題されます。選択式の設問では測りがたい国語の主体的な運用能力を測るため、解答はすべて記述式としています。なお、文科・理科それぞれの教育目標と、入学試験での配点・実施時間をふまえ、一部に文科のみを対象とした問いを設けています。

第一問は現代文の論理的文章についての問題で、医療における「ケア」の意義を論じた文章を題材としました。近代医療が患者の自己責任と国家の管理に支えられるのに対し、「ケア」は関係者すべての共同作業であり、公共的な営みなのだと明快に説かれています。論旨を正確にとらえる読解力と、それを簡潔に記述する表現力が試されます。また、ある程度の長文によって全体の論旨をふまえつつまとめる能力を問う問題を設けています。

第二問は古文についての問題で、『落窪物語』の車争いの場面を題材としました。古文の基礎的な語彙・文法の理解をふまえつつ、従者たちの言い争うありさまを正確に理解する力が試されています。文科ではさらに、話の鍵となる箇所を具体的に説明させる問題をも出題しました。

第三問は漢文についての問題で、江戸中期の儒者、井上金峨の『霞城講義』を題材にしました。漢文の基礎的な文法・文型をふまえることと、「君子」と「小人」との対比に表れた儒教的発想をつかむことが求められます。文科ではさらに、「聡明之主」に限って陥りやすい誤りとはどのようなことか、文脈を正確にふまえて答えさせる問題をも出題しました。

第四問は文科のみを対象とします。文学的内容をもつ文章についての問題で、今回は夏目漱石が亡友正岡子規を偲んだ文章を題材としました。行間が雄弁な文章なので、表面的な読み取りでは太刀打ちできません。「拙」の語に込められた万感の思いをどこまで丹念にくみ上げ、心情という一見曖昧模糊とした領域で明確な理解を組み立て、適切なことばでそれを表現できるかどうかが問われます。豊富な語彙を自在に操れるだけの読書量が要求されているともいえるでしょう。